

インド北東部考察

2025年度「SPFインド北東部 平和を築く人材育成プログラム」報告書

川和ニコラ [東京大学]

2026年6月7日

はじめに

私は笹川平和財団戦略対話・人材育成グループが企画した「インド北東部 平和を築く人材育成プログラム」（以下、研修）に選抜され、2026年2月1日から2月13日にかけてインド北東部3州を訪れた。インド北東部は8州から構成されており、今回の研修では順にメガラヤ州、アルナーチャル・プラデーシュ州、ナガランド州を訪問した。

研修に選抜された学生参加者は私を含め6名で、それぞれの関心は平和構築、公衆衛生、経済学、国際関係学、教育開発など多岐にわたり、対象地域もそれぞれアフガニスタン、ラテンアメリカ、西アフリカ、南アジアと多様であった。参加者は各々の関心に基づき、渡航前にインド北東部に関する着眼点や課題を設定し、事前レポートとして提出することが求められた。私は「『中心一周縁』の関係性から考えるインド北東部の政治と安全保障」という表題のレポートを提出した。

本報告書では、第一章で派遣前の私自身のインドに対する印象と、事前レポートで整理したインド北東部に関する着眼点を述べる。第二章では、事前レポートで提示した論点に対し、現地での体験を踏まえて応答する。さらに第三章では、研修の中で特に印象に残った4つのテーマに関して、インド北東部での実体験や観察を交えて紹介し、より普遍的な問題として論じたい。

第一章 渡航前——インドに対する印象と事前レポート

「インドはひとつの時空間のなかで、いくつもの世紀を生きている。進歩と退行を同時にやってのけているのである。」（アルンダティ・ロイ）

インドという巨大な国家に対する私のイメージは長らくあるインド人作家の言葉によって印象付けられていた。アルンダティ・ロイは1961年にインド北東部のメガラヤ州で生まれたインドを代表する作家である。日本の約9倍の国土を持ち、中国を人口規模で上回り現在では世界最大の人口を擁するインドにおいて、その内実が実に複雑であることは想像に難くない。ロイのエッセー『女たちは気づいている…“専門家”には任せておけないことに』の最初の一文はまさにそれを表現している。

複雑性という観点で言えば、インド北東部はインドにおいて最も複雑な地域の一つだろう。例えば、インド全体で話される400種類以上の言語のうち、約半数はインド北東部で話されているようだ。北東部の人口が全体の約4%に過ぎないことを踏まえれば驚異的な数値である。そのようなインド北東部であるが、近年ますます同地域への関心はインド国内でも日本国内でも高まっている。インドの中央政府は同地域の開発に取り組む北東地域開発省を設置し、人口約4%の地域に中央予算の10%を配分しており、インド北東部の連結形成の向上を目的としたプロジェクトを多数展開している。日本においては、明石書店から『インド北東部を知るための45章』が2024年に発行されたほか、JICAや笹川平和財団が同地域の発展や人材育成、伝統文化の記録に注力している。

私の関心分野は国際関係学と政治学であり、地域としてはこれまでアフリカに興味を持ってきた。そのような視座から、インド北東部に渡航を控えた1月に提出した「事前レポート」では、特に「中心一周縁」関係からインド北東部を理解することに努めた。以下は「事前レポート」の内容を加筆・修正したものである。

1. インド北東部とデリーの関係

事前レポートでは、私の関心分野である国際関係学と政治学の視点から、着眼点をいくつか設定した。まず、国際関係論における「中心一周縁」という視点でインド北東部を捉えることを試みた。

国際関係論における「中心一周縁」という概念は、しばしば「西洋—非西洋」という構図と連動して理解されてきた。その理論的源流は、1930年代にイタリアのマルクス主義思想家のグラムシが提唱したサバルタンの概念にある。グラムシは軍隊用語で「下位階級」を意味するサバルタンを転用し、資本主義国家において資本家や国家権力から疎外された無産階級を表現するために用いた。その後、マルクス主義的な文脈に加え、脱植民地化が進む中でポストコロニアル理論の文脈でも「中央一周縁」は論じられてきた。代表的な理論として従属論や世界システム論がある。これらの議論では、政治的・経済的・軍事的に優位な「中心」が、資源や労働力、政治的影響力を「周縁」から吸い上げる構造が前提とされてきた。

もっとも、この枠組みは国際社会のみならず、一国内部にも適用可能である。すなわち、首都や中枢地域が「中心」として機能し、地理的・文化的・政治的に距離のある地域が「周縁」として位置づけられる構造である。インドにおいては、デリーを中心とする北インドの政治・経済・文化的中枢と、北東部やカシミール、部族居住地域などとの関係が、この「中心一周縁」構造として捉えられる。

インド北東部における「中心一周縁」はどうだろうか。同地域は、地理的にも本土と細いシリグリ回廊でのみ接続されており、歴史的にも植民地期以降にインドに編入された地域である。このような背景は、北東部が中心から「異質な空間」として認識されやすい条件を形成してきた。イギリス統治下に設定された「ライン・システム」は、まさに「中心一周縁」を具現化したものと言っていい。少数部族の保護の名目で設置された入域規制によってインド北東部は「隔離地域」と「準隔離地域」に分類され、20世紀初頭から一部の地域は隔離され代議権を有さなかった。すなわちインド北東部も「中心一周縁」の関係から捉えることができる。

次の事例はインド北東部とデリーの「中心一周縁」関係を如実に表している。1947年のインド独立以降、インド北東部は民族的自治や分離独立を求める武装運動が長期にわたって継続してきた地域である。これまで中央政府はそうした運動を主として治安・軍事の問題とし

て扱ってきた。その象徴が、武装勢力対策を目的とする軍特別権限法（AFSPA）の長期適用である。同法は1958年に施行され、治安部隊に広範な権限を付与する一方で、住民の人権侵害や説明責任の欠如をめぐる批判を招いてきた。例えば、AFSPAの適用がなされる地域では、治安部隊は令状なしでの捜索が可能で、治安部隊の将校は民間人を射殺しても罪に問われない。

このような治安中心のアプローチは、短期的には秩序維持の効果を発揮するかもしれない。しかし、北東部の住民にとっては、複雑な民族構成や歴史的経緯の中で蓄積されてきた疎外感や不信感をいっそう深め、対立の再生産を招きかねないことが指摘されている（井上 2003）。つまり、中央政府の治安部隊の駐留は、結果として同地域におけるさらなる不安定化を招いている可能性もある。結局のところ、中央政府の安全保障の論理は、周縁に生きる人々の権利や生活世界と必ずしも整合的ではない。そこで、現にインド北東部の人々がデリーとの関係をどのように捉えているのだろうか。

2. インド北東部の政治

インドは「世界最大の民主主義国家」と呼ばれる反面、モディ政権下のヒンドゥー至上主義の台頭によって、少数派への抑圧や表現の自由の制限など、権威主義化の進行が懸念されている（湊 2024）。少数民族という観点では、インド北東地方の民族構成は非常に多様であり、中央政府による少数民族保護の政策は、保護される民族集団と保護対象に含まれない民族集団の軋轢を生じさせてきた（井上 2009）。北東部の住民は、元々の住民に加え、周辺諸国から移動してきた住民、イギリス植民地期にベンガルから流入してきた住民、インド国内から移動してきた住民など非常に多様であり、文化、言語、宗教をはじめとするそれぞれのアイデンティティ構成要素は複雑である。したがって、モディ政権の押し進めるヒンドゥー至上主義のフレームワークに収斂され得ないだろう。

そのようなインド北東部の住民の多様性は、同地域の政治にも影響を与える。インド北東各州の政治の特徴の一つは地域政党の存在である。北東部では地域政党が各州に存在し、少数派エスニックグループや宗教的少数派の利益が代表されている。

他方で、そうした地域政党の獲得議席がインド人民党（BJP）やインド国民会議（会議派）といった全国政党の獲得議席に比べて多いわけでは必ずしもない点が興味深い。インド北東部においても、2014年のモディ政権誕生以降に全土で見られるBJPの勢力拡大と会議派の後退という傾向は見られる。厳密にはそれぞれの州においてBJP勢力の浸透状況は異なるが、研修の訪問先の3州においては、いずれもBJPが近年の州議会選挙を経て与党になっている。アルナーチャル・プラデーシュ州ではBJPが2021年の州議会選挙で最も多い60議席（議席総数126）を獲得し、アソム人民会議（9議席）、統一人民党リベラル（6議席）とともに与党となった。ナガランド州においては、2023年の州議会選挙で最も多く議席を獲得したのは民族主義民主進歩党で25議席（議席総数60）であり、続く12議席を獲得したBJPと与党を形成した。それに対して、ナガ人民戦線の獲得議席は2議席にとどまっている。最後にメガラヤ州では、2023年の州議会選挙において民族人民党が最も多い26議席（総議席数60）を獲得し、それぞれ2議席を獲得したBJPと丘陵州人民民主党と与党を形成した。つまり、州議会のレベルにおいても、BJPはインド北東部に浸透している。

では、2024年のインド総選挙ではどうだろうか。アルナーチャル・プラデーシュ州ではBJPが勝利したが、ナガランド州とメガラヤ州では会議派と地域政党が勝利している。他方で、インド北東部全体で見れば、やはりBJPが優勢と言えるだろう。「中心—周縁」の関係性に

においては、周縁は中心による支配や抑圧に対して一般的には抵抗すると考えられる。インド北東部においては、「周縁」が必ずしもひとまとまりでないことを踏まえても、なぜ中央政権与党のBJPが一定の支持を得ているのだろうか。特に、2019年の州議会選挙を経てアルナーチャル・プラデーシュ州議会においては、BJPは地域政党である民族人民党と与党を形成したが、それはどのように説明できるのだろうか。

モディ政権は北東部に焦点を当てた政策である「ルック・イースト」を「アクト・イースト」に進展し、インド北東部の経済分野に力を入れてきた。モディの「ヒンドゥー至上主義者」というのは一面であって、有権者は「開発の先導者」という一面をより重視しているかもしれない。事実、インド北東部は人口ではインド全体の4%しか占めないにもかかわらず、近年では中央政府の予算のおよそ10%が配分されている。ヒンドゥーというイデオロギーを前面に押し出し、少数派から国民の均質化を狙っていると批判されるBJPはなぜインド北東部において影響力を発揮でき得るのだろうか。世俗化が進行し有権者は地域政党であるというだけでは投票しないのだろうか。また、BJPはインド北東部においてどのような政治的レトリックを用いているのだろうか。

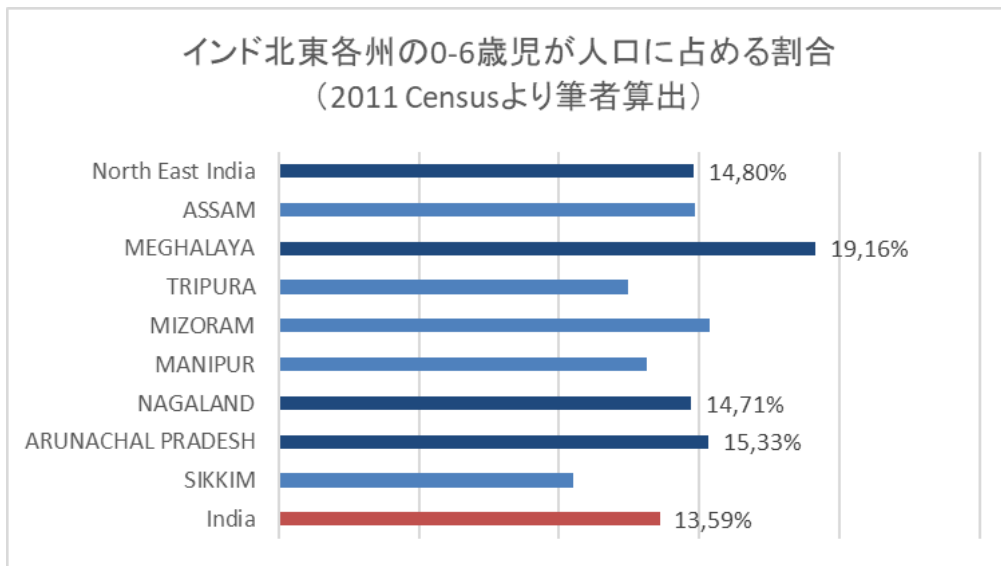
3. インド北東部各州の投票率の高さ

インド北東部では投票率が極めて高い。2022年にインド他州で行われた議会選の多くで投票率は60-70%に留まっており、これは近年日本の統一地方選挙の投票率が50%を下回っていることを鑑みれば非常に高い数値ではあるが、インド北東部各州においては、投票率は80%以上とさらに高い数値である。アルナーチャル・プラデーシュ州では2019年の州議会選挙で82.17%、ナガランド州は2023年の州議会選挙で86.72%、そしてメガラヤ州では2023年に行われた州議会選挙で81.57%の投票率を記録している。これほどまでに投票率が各州で高い背景には何が考えられるのであろうか。有権者の政治的有効性感覚が高いからだろうか、選挙運動が盛んなのだろうか、政治的動員をかけやすいのだろうか、投票しやすいのだろうか、学校などで選挙に行くことの重要性を学んでいるのだろうか。

4. インド北東部の若者

筆者は若者団体のメンバーとして、国連未来サミットやアフリカ開発会議（TICAD 9）をはじめとした国際会議への参画をはじめ、日本国内においてもこども家庭庁や外務省に対して、市民社会組織や他の若者団体と協力して日本の若者の声を発信してきた。日本は年齢の中央値が約48歳と世界で最も高齢な国の一つではあるが、筆者が関心のある西アフリカ諸国では人口の70%が25歳以下の国などがあり、多くのアフリカ諸国では若者の雇用対策をはじめとして、どのように若者を社会的に包摂するかが非常に大きなテーマとなっている。実際に、一部の国々ではZ世代がSNS等を通じて政治や社会への不満を訴え、政権批判が過熱した国では政権交代も起きている。

インド北東部ではどうだろうか。インドは10年おきに国勢調査（Census）を実施している。しかし、2021年に公表される予定だったCensusは、新型コロナウイルスのパンデミックの影響で延期されており、ようやく2026年に実施するという。したがって最新のデータではないが、2011年のCensusのデータから、インド北東部の各州の人口に占めるこども（0-6歳）の割合を算出したのが下のグラフである。



前提として、日本では2024年において15歳未満の人口は全体の11.3%を占める。それに対して、インド全体でこども（0-6歳）が占める割合は13.59%であり日本よりも年齢がはるかに若い。インド北東部全体では14.8%とインド全体よりも少し高い。しかし、インド北東部においても、シッキム州とメガラヤ州では約8%の差があることから、州によって状況は異なることが明らかになった。ちなみに、シッキム州はインド北東部の中で最も一人当たりのGDPが高い。

今回訪問する3州は、インドの中でも人口に占めるこどもの割合が高く、特にメガラヤ州ではおよそ5人に1人が6歳以下である。そのため、彼らが政治や社会、そして「中心一周縁」の観点から中央政府などに対して、普遍的にどのような印象を抱いているかについても現地での交流を通じて把握できればと考えている。

第二章 インド北東部での研修——事前課題への応答

1. インド北東部とデリーの関係

インド北東部の人々がどのようにデリーないし北東部を除いたインド（彼らの言葉で「メインランド」）との関係を捉えているかについては十人十色できわめて多面的である。研修ではインド北東部の住民の中でも、主に指定トライブ（Scheduled Tribes : ST）の方々から話を聞いたという点に留意しなければならない。

まず印象に残っているのは、メガラヤ州セント・アンソニーズ大学の学生との交流である。彼らにモディ政権をどのように捉えているか質問すると、全体として、学生らはモディ政権の宗教色が強くなっていることへの危機感について触れながらも、他方でBJPが政権与党の座についてからの生活環境の向上と、近年のモディ首相の外交手腕について高く評価していた。生活環境の向上の象徴として彼らが口をそろえて主張したのはトイレの整備である。会議派政権の時にはさほど関心の当てられなかった庶民の日々の生活の向上においてモディ政権を評価するべきだ、というわけである。また、経済分野についてもBJP政権になって以前より向上したという意見もあった。他方で、その点については会議派政権下で推し進められた経済政策の果実がBJP政権に結実しただけだという意見もあった。

また、北東部とメインランドの関係について、セント・アンソニーズ大学の学生らが紹介してくれたことの中には、デリーをはじめとする北東部以外のインドの都市において北東部出身者が直面する差別や迫害もあった。実際に、北東部の出身者が集団で暴行を受け殺害されるケースなどが発生している。私は同年3月にもう一度インドを訪れ、デリーで行われた国際会議に参加したが、イベントの会場のスタッフの多くは北東部の出身だった。インドのホテルをはじめとするサービス産業には北東部出身者が多く従事している。

続いて訪れたアルナーチャル・プラデーシュ州では、中国との国境係争地であることもあり、他の州に比べて印象として多くのインド国旗を街中で目にした。同州には26の指定トライブが存在し、100を超えるサブ・トライブが存在するが、国境係争地であるためヒンディー語教育に非常に注力しており、公用語としてヒンディー語が広く用いられていた。同様の理由で、アルナーチャル・プラデーシュ州とデリーとの関係は、北東部の他州とデリーとの関係とは一線を画すのものであると理解するのが適切である。国境係争地であるという性質上、アルナーチャル・プラデーシュ州はJICAだけでなくアジア開発銀行（ADB）のような国際機関からも融資を受け入れることができない。そのような背景から、北東部の他州に比べてアルナーチャル・プラデーシュ州はデリーといっそう強固な関係を形成している。

ナガランド州とメインランドの関係は第三章で扱いたい。

2. インド北東部の政治

“We don’ t have a choice.”

アルナーチャル・プラデーシュ州を訪問した際、筆者は現地の住民に「なぜBJPが人気なのですか」と質問した。その際に返ってきたこの一言は、インド北東部の政治を理解するうえで示唆的である。北東部の中で同州が特異な位置づけにあることは先述のとおりだが、今回訪れた3州すべてにおいて、BJPは議席数で最大政党であるかどうかにかかわらず、いずれも与党連立の一角を占めていた。この点は、北東部における政党間関係や中央政府との政治的連結性を考えるうえで重要な観察である。

インド北東部の政治を読み解く際にしばしば用いられる概念として、「うわべだけの連邦制」がある（木村 2021: 42-45）。「うわべだけの連邦制」とは、憲法上は連邦制を採用しているにもかかわらず、実際には中央政府に権限が集中し、州の自治が十分に機能していない状態を指す。インド北東部においては、州政府の財政が中央政府からの配分に大きく依存しているため、中央政府の与党が州議会においても与党を構成する傾向があり、州の政治は中央政府の与党から影響を受ける。つまり、デリーの政局を括弧に入れた状態で北東部の政治を観察することは難しいのである。そのため、厳しい見方をすれば、中央政府の与党がBJPである限り、アルナーチャル・プラデーシュ州の住民の一人が述べた「私たちには選択肢はない」という言葉は、北東部と中央政府の政治関係を象徴していると捉えることができる。

また、北東部の政治家が中央政府の政局を見極めながら巧みに政党を乗り換える姿も観察された。たとえば、アルナーチャル・プラデーシュ州のパマ・カンドゥ州首相は、当初は会議派に所属して政治家としてのキャリアを開始した。彼の父であり、2007年から2011年にかけて同州の州首相を務めたカンドゥ氏も会議派の政治家であった。しかし、ナレンドラ・モ

ディ率いるBJPが2014年に中央政府の与党となった後、同氏は2016年にBJPへと移籍し、州首相に就任した。

今回の研修では、ペマ・カンドゥ州首相に表敬訪問する機会があり、筆者はBJPのヒンドゥー至上主義的傾向と、アルナーチャル・プラデーシュ州の宗教的・文化的多様性をどのように調整しているのかを質問した。これに対しカンドゥ氏は、BJPがヒンドゥー至上主義的であるという国際的な見方は不正確であり、「インドでは、インドで生まれたものはすべて守られなければならない」と述べた。彼によれば、ヒンドゥー教を広めることはヒンドゥー教のイデオロギーではなく、むしろヒンドゥー教は少数派宗教も保護しようとしているのだという。少なくともカンドゥ氏自身は、そのような理解のもとで自らの立場を位置づけているといえる。

3. インド北東部各州の投票率の高さ

セント・アンソニーズ大学の学生らに投票率が異常に高い理由について質問した。彼らによれば、政治家の中には選挙集会に訪れる人々に金銭や物資を配っている人もいるそうである。そして、識字率の低さ、教育の不足、貧困といった理由から、人々はそのような動員に応じてしまうという。別の学生は、時の政権や多数党が、自党に有利になるように選挙区の境界線を恣意的に引き直すゲルマンダリングが行われていると付け加えた。

アルナーチャル・プラデーシュ州のラジブ・ガンディー大学の学生にも同様の質問を行ったところ、その学生は「絶対的な理由はない」と断ったうえで、インドの有権者登録制度の不備を指摘した。彼によれば、本来投票資格を持たない年齢の若者が登録され、投票できてしまう事例が存在し、インドでは若年人口の比率が高いことから、結果として投票率が押し上げられている可能性があるという。しかし、この説明は、インド全体で若者人口が多いという事実を踏まえると、なぜ北東部の投票率が全国平均よりも特に高いのかを説明するには十分とはいえない。また、インドにおける投票率の算出方法については、投票関連データがどのように収集・集計されているのかを含め、より詳細な検討が必要である。

4. インド北東部の若者

投票率の高さに関連して、セント・アンソニーズ大学のある学生が述べた「They (メガラヤ州の若者) know if they vote, they can change.」という言葉が印象的であった。実際に北東部の若者と議論する中で、筆者が普段接する日本の学生と比較すると、彼らは投票行動を通じて状況を変えられるという実感をより強く持っているように感じられた。この点は、同地域で投票率が高い理由の一端を示すものと考えられる。

最後に行われたCensusのデータが約15年前であることを鑑みれば、現在の北東部の人口に占める若者の割合はもっと高いと判断して間違いない。インド北東部の学生との交流については第三章で具体的なエピソードを通じて記述するが、全体として政府に対して強い不満を抱いているという印象は受けなかった。私たちが接触した若者の多くは大学に通う学生であり、彼らが北東部の若者全体をどの程度代表しているのかには留意が必要である。しかし、その点を踏まえても、彼らは若者の就職が社会課題であることを認識してはいるものの、政府に対して抜本的な改革を求める姿勢は見られなかった。他方で、シロンタイムズの著名なジャーナリストは、北東部の若者に関して、シングルマザーの増加と学校からの退学率の上昇を主要な課題として指摘した。また、学校教育と労働市場との連結性が乏しいという問題

意識は、セント・アンソニーズ大学の学生からも共有されており、さらにメガラヤ州の中学校副校長も同様の見解を示していた。

第三章 インド北東部をエピソードから捉える

第三章は現地の経験をベースに発展させたものである。インド北東部での研修の中で、特に印象に残った4つのテーマ——「インド北東部の学生」、「インド北東部のこれから」、「ナガランド州の正義について」、「インド北東部から日本に働きに来る若者たち」——について、エピソードを交えて私なりの理解や考えを示したい。

1. インド北東部の学生

インド北東部での研修で最も印象に残っているのは、各州の学生との交流である。メガラヤ州ではセント・アンソニーズ大学、アルナーチャル・プラデーシュ州ではラジブ・ガンディー大学、そしてナガランド州ではナガランド大学を訪問し、それぞれの大学の学生と双方向的な交流を行うことができた。また、アルナーチャル・プラデーシュ州では、将来日本の介護産業で働くことを目指す若い女性たちとも交流した。以下では、特に印象に残ったエピソードを紹介したい。

セント・アンソニーズ大学には2月4日の午前中に訪れた。同大学はメガラヤ州の州都シロンに位置し、宿泊先であったAsian Confluenceから徒歩10分ほどの距離にある。大学の敷地に入り、校庭を抜けて建物に入ろうとした際、ちょうど体育の授業が校庭で行われていた。そこで非常に驚いたのは、学生たちがライフル銃の形を模した用具を使っており、体育というより軍事訓練のように見えたことである。引率してくださった現地の方によれば、これは一般的なことだという。なお、セント・アンソニーズ大学はインド北東部でも著名な大学であり、メガラヤ州以外の北東部諸州、さらには北東部以外の州からも少数ながら学生が集まっている。

大学の副学長や教員の方々から歓迎の挨拶をいただき、日本人学生の簡単な自己紹介を終えた後、全体で大きな輪を作り、交流に参加した約30名の学生が一人ずつ自己紹介を行った。私がこの交流で特に驚いたのは、現地の学生たちが非常に積極的で、自分の言葉で多くのことを語ってくれた点である。例えば、自分がどのような背景を持っているのか、何に関心があるのか、そして日本について知りたいことなど、率直に話す姿が印象的だった。私は彼らからいただいた質問をすべてノートに記録したが、その数は全部で12個にのぼった。

学生からいただいた質問

1. なぜ日本は文化的に豊かなのか
2. 日本の大学でがん研究の優れた研究機関はあるか
3. 日本の大学で生物学、特に植生学の優れた研究機関はあるか
4. 日本はどのように世界平和に貢献しているか
5. 日本について一般に語られるイメージで、実際とは違うものはあるか
6. 日本とインドはどのように異なるか
7. 日本における学生生活はどのようなものか
8. 神道とはどのような宗教なのか

9. 日本において、人々はどのように現代世界でバランスをとって生きているのか
10. インド北東部に対する日本の援助はどのようなものか
11. モチベーションを維持するためになにをやっているか
12. 日本では地震にどのように対応しているか

ノートに記録していた質問をすべて書き出してみたが、現地の学生の関心は非常に幅広い。私たち日本からの学生は、中には回答が難しいものもあったが、できる限り丁寧に答えるよう努めた。研修を通じて私が意識していたのは、現地の人々が日本側の質問に答えるだけの一方的な交流ではなく、双方向的な対話を実現することであった。それは礼節というだけでなく、インド北東部の人々が日本をどのように捉えているのかに関心があったからである。

続いて、私たちが関心を寄せていた「平和構築」、「部族の文化と歴史」、「中央政府との関係」という三つのテーマに分かれて議論を行った。私は「中央政府との関係」を扱うグループに参加したが、そこで特に印象に残ったのは、学生たちが臆することなく政治について意見を述べていた点である。私のグループには6名ほどの現地学生がいたが、全員が何らかの形で発言していた。しかも、参加者同士が必ずしも顔見知りではない様子であったにもかかわらず、政治的な話題についてこれほど活発かつ率直に意見交換が行われていたことは、日本の大学ではあまり見られない光景であり、非常に興味深かった。

アルナーチャル・プラデーシュ州のラジブ・ガンディー大学でも、同様に1時間以上にわたり学生たちと議論を行った。現地の学生は、日本が少子化に直面していること、それに伴い外国人労働者の受け入れが進んでいること、そして他方で外国人に対する偏見や反感が存在することについて理解していた。これは私にとって予想外であった。私が自己紹介の際に「将来の日本の首相としてぜひ覚えてください」と述べたこともあり、学生たちとは日本の国内問題にどのように向き合うべきかについて意見を交わすことになった。学生のほとんどは日本人と会話するのが初めてであり（同様に私もアルナーチャル・プラデーシュ州の人々と会話するのは初めてであるが）、日本人は政治に関して積極的に発言するという第一印象を与えてしまっただろう。

また、ラジブ・ガンディー大学では、学生たちが歓迎の民族舞踊を披露してくれた。特に印象的だったのは、アルナーチャル・プラデーシュ州には26の指定トライブが存在するため、一人ひとりが異なるトライブの衣装を身にまとい、音楽も複数のトライブの曲をつなぎ合わせた構成になっていた点である。多様性を象徴するような舞踊であり、同州の文化的豊かさを強く感じさせるものであった。一つのトライブの音楽だけではなく、互いの音楽を組み合わせ、皆で共有しているのが印象的である。

同大学訪問に先立ち、私たちは州政府を表敬訪問し、首席事務官をはじめとする州政府の幹部から州の現状について説明を受けた。その際、同州は経済的に比較的恵まれているという印象を受けた。しかし、実際に学生たちにその点について尋ねてみると、彼らは必ずしも同じ認識を共有しているわけではなかった。このギャップは、行政側と若者世代の視点の違いを示す興味深い発見であった。さらに、大学訪問の翌日にアルナーチャル・プラデーシュ州首相への表敬訪問を控えていたため、学生の一人に「もしあなたが首相に質問できるとしたら、どのようなことを聞きたいか」と尋ねてみた。すると、「政治家の汚職対策として何に取り組んでいるのか」という非常に興味深い回答が返ってきた。私はそのリクエストを受け、翌日の訪問では州首相にその質問をしっかりと伝え、州首相の回答をその学生に後日フィードバックした。

ナガランド州のナガランド大学の学生との交流時間は他の2大学と比べて少なかったものの、他大学との交流に比べて少人数でよりざくばらんに会話することができた。その時に受けた印象は、ナガランド大学の学生は他の2大学と比べて控え目だということだ。ナガランド州は、太平洋戦争中の1944年に日本軍が展開したインパール作戦の最激戦地の一つであり、先住民族であるナガ族の村々も巻き込まれ被害を受けたことから、日本への印象について聞いた。戦時中の日本について祖父母から話を聞いたことがあるという学生もいたが、日本に対する印象はゲームやアニメによって形成されたという声が多かった。また、三章で扱うナガランド州の独立運動に比べれば、インパール作戦や日本との関係はより会話のしやすい話題であるという印象を受けた。

2. インド北東部のこれから

「自然は豊かで、そこに暮らす人々の生活はシンプルそのもの。家族、親戚同士のつながりは強固で助け合う。そして子供たちの表情は底抜けに明るい。ここには私たち日本人がどこかに置き去ってしまったものが確かにある。」（延江由美子）

2. 1 ホームステイ

研修の中で最も大きな学びは、現地の人々との交流から得られた。特に、各州で道中を共にしてくださった方々とのやり取りや、メガラヤ州で経験したホームステイは、知識の獲得にとどまらず、私の感受性を強く刺激する大変有意義な時間であった。

メガラヤ州で私たちを家に迎えてくれたのは、ジョーさんの一家である。ジョーさんは私より少し若い大学生で、メガラヤ州のカシ族に属している。ホームステイ当日、ジョーさんは入門さんと私を車で迎えに来てくれた。シロン中心部から少し離れた丘陵地帯の住宅街に彼の平屋があり、家の門前に到着すると、向かいの家に小学生ほどのこどもたちが集まっていて、私たちを見るなり明るい声で何度も「こんにちは」と声をかけてくれた。事前に私たちの訪問を知らされていたわけではないようだが、ジョーさんによれば、普段からSNSなどを通じて日本や韓国のポップカルチャーに触れているのだという。こどもたちの屈託のない表情はとても印象的で、元気をもらった。

家にはジョーさんの母親と祖父がおり、3人でカシ族の料理を振る舞ってくれた。インド北東部の料理は米を主食とし、豚肉や鶏肉を用いる点など、日本の食文化に近い部分がある。日本食との大きな違いは唐辛子の使用量だが、私は研修を通じて北東部の料理にすっかり魅了された。2月上旬の夜は外気温が10度を下回り、私たちは炭で暖をとっていた。ジョーさんの住む地域は上水道こそ通っているものの下水道は整備されておらず、温水も出ない。シャワーは、バケツにためた真水を投げ込みヒーターで温め、もう一つのバケツの真水で温度を調整して体を流すという方法だった。私にとって初めての経験で、温めた水はかき混ぜないと上下で温度差が生じることに気づかず、最後のほうはほとんど真水に近い温度になってしまった。そのため、10度を下回る気温の中で最後は冷たい水を浴びることになったが、生存本能が刺激されたのか逆に体が温まり食欲が増した。これもまた貴重な経験であった。寝る際は毛布を二重にかけ、朝になるとどこかで鶏の鳴き声が聞こえる。丘の上にあるジョー

さんの家からは、非常に美しく幻想的な景色が広がっていた。ホームステイは忘れがたい体験となった。

インド北東部は、第一章で述べたように、インド国内でも開発が遅れている地域として認識されている。そして北東部の内部でも地域差は大きい。私は北東部を巡るなかで、この地域における「発展」とは何を意味するのかについて、随所で考えさせられた。

2. 2 メガラヤ州の山間の集落の売店に並べられたグローバル資本主義の産物

「征服された側のローカル文化としては、自分の従属性を小さいように見たい。征服した側の世界市場としては、自分の覇権を小さいように見せたい。こうして両者の思惑は一致し、持ちつ持たれつの関係だという幻想が育まれる。だが実際の両者の関係は、ウサギを呑み込むニシキヘビのように、一方的な力関係だ。」 (ベンジャミン・R・バーバー)

メガラヤ州二日目、私たちは州都シロンから車で2時間ほど移動し、Sohraと呼ばれる地域へ向かった。その道中、山間の集落で車を止め、ローカルなカフェに入った。そこで、これまで食べたことのない現地の菓子を口にした。車に戻る前、私は周辺を少し歩いてみた。集落を貫く道路の両脇には家や店が並び、店先には新鮮な豚肉の大きなブロックが置かれている。私は生活用品や包装された食品・飲料を扱う、コンビニのような店に入った。そこで目に飛び込んできたのが、アメリカのブランドであるLay'sのポテトチップスだった。まるで自分の存在を当然視するかのようになり、何食わぬ顔で棚に並ぶその姿に、私は「あなたはどこから来たのですか」と問いかけたくなった。集落の人々にとって、突然現れた見知らぬ外国人である私たちは非日常的な存在だろうが、ではアメリカのポテトチップスはどのように受け止められているのだろうか。もしやローカルな存在なのだろうか。

私たちは日本から10時間余りのフライトでデリーに到着し、そこからアッサム州へ飛び、さらに車で約3時間かけてメガラヤ州シロンへ、そしてシロンから数時間かけてこの集落にたどり着いた。しかし、アメリカのポテトチップスは、私たちがこの地を訪れるよりもはるかに速い速度でこの集落に到達したのだろう。では、なぜここに届いたのか。それは需要があるからなのだろうか。私は、市場が国境や地理的距離を容易に超えていくことを、改めて実感した。ただ果たしてそこには現地の人々の声は反映されているのだろうか。

Lay'sが置かれているのは「需要があるから」なのか、それともそもそも「需要を作り出すため」なのだろうか。集落の売店には、ポテトチップスのほかにも、海外製の歯磨き粉や洗濯用洗剤など、輸入された日用品が置かれていた。より便利で、より安価な製品は集落の消費者の需要を満たすかもしれない。しかし、シロンから数時間を要する小規模な集落において、こうした商品が現地の生活世界にどのような変化をもたらすのかは、慎重に考える必要がある。日本においてもショッピングモールがその周辺地域に及ぼす様々な影響について異なる立場から賛否が分かれるように、メガラヤ州の小集落でより便利で、より安価な製品が与える影響は必ずしも一方向的な恩恵として理解できるものではない。

つまり、グローバルな資本主義がもたらす利便性と、地域社会が長い時間をかけて育んできた生活の質や価値観は、必ずしも同じ方向を向いているわけではない。市場は国境や地理的距離、政治的な対立を容易に越えていくが、その逆方向——すなわち、集落の人々の声や

生活世界が市場の論理に反映される経路——は著しく細い。山間の小さな集落の売店に並ぶポテトチップスは、こうした非対称性と緊張を象徴する存在として、私の目に映ったのである。

2. 3 インド北東部の開発

「“進歩の代価”，この言い回しが、あらゆる議論を開発賛成派と反対派の論争にすりかえる——採るべき道はひとつしかない、と思い込ませる。開発に賛成、それしかないでしょ？」（アルンダティ・ロイ）

私たちが訪れたインド北東部の主要都市（グワハティ、シロン、イタナガル、コヒマ）は、それぞれに違いはあるものの、舗装された道路が整備され、建物が林立し、人々の活気に溢れており、インドの中では開発が進んでいない地域であるという先入観を再考させた。とりわけ北東部への玄関口であるアッサム州のグワハティは他の州に比べて高層建築が多く、都市としての発展度合いが一段と高い。それぞれの都市には日本との共通点も見られた。特に印象に残ったのは電柱と電線である。しかし、メガラヤ州のシロンの電線の量は日本とは桁違いで、数十本から数百本の電線が頭上の手が届きそうな位置にまで垂れ下がっている。渋滞も経験した。シロンでは、渋滞がなければ5分で到着するはずの道のりに30分以上かかった。都市の中心部でも道路は片側一車線のところもあり、特に通勤時間帯には大きな渋滞が発生する。丘陵地帯という地理的特徴も相まって、ナガランド州のコヒマでは市外に出るまでに30分以上を要した。

アッサム州を除く3州には多くの指定トライブが居住しており、それぞれの州都では指定トライブ以外の人々も、様々な指定トライブの人々も共に暮らしている。インド北東部内部にも「中心一周縁」の構造が存在することを実感した。そして、大学はまさに都市の多様性を象徴する機関である。大学に通う学生たちは、インド北東部の発展や世俗化についてどのように考えているのだろうか。

第二章で述べたように、学生たちは北東部の発展を肯定的に評価していた。若者人口が急増するなかで、雇用機会の創出は重要である。他方で、発展に伴って自分たちの文化や生活様式が今後も継承されていくのかについても彼らは深く考えていた。都市部の家庭ではすでに世俗化が進行しており、所属するトライブへの帰属意識が薄れてきているという声もあった。他方で、トライブとしての集団的アイデンティティを守りたいという願いも聞かれた。

都市部を離れると、インド北東部の開発において「連結性（connectivity）」という言葉が頻繁に用いられる理由を実感する。都市間の移動手段は基本的に車に限られ、道路状況は近年改善されてきたとはいえ、丘陵地帯であることに変わりはない。山岳地帯では、都市部では見られなかった伝統衣装を身にまとった人々が時折道路を歩いている。また、都市部の建設需要を支えるためなのか、重機で削られて裸になった山肌がところどころに見える。そのため、森林が約80%を占めるはずのアルナーチャル・プラデーシュ州のイタナガルでさえ、建物や植物の表面に砂や塵が付着していた。

インド北東部は今後どのように変化していくのだろうか。ジョーさんはどのような人生を歩むのだろうか。あのこどもたちの笑顔は、この先も変わらず見られるのだろうか。確かなのは、インド北東部が発展の道を進んでいるということである。そして、中心である都市部

の発展速度は、周縁である集落の発展速度よりもはるかに速い。他方で、シロンタイムズの記者が指摘していたように、都市の発展によって都市特有の社会問題も生じており、格差の拡大が進行していく可能性がある。

私がインド北東部で意見を交わした学生たちは英語に堪能であり、いまやインターネットを通じて多くの情報にアクセスしている。ナガの若者たちに限っては、ヒンディー語に馴染みが薄いため、普段からヒンディー語の音楽よりも英語の楽曲を好む傾向があり、映画についてもボリウッド作品より、ハリウッド映画やアメリカのドラマを選んで観ることが多い（太田 2021）。セント・アンソニーズ大学の学生が述べていたこと——「They（メガラヤ州の若者） know if they vote, they can change.」——に付け加えるならば、今後ますます若者が社会変革の中心を担うようになるだろう。各州の若者との意見交換を通じて、私は、社会を自らの手でより良い方向へ発展させたいという、彼らの活気に満ちた意欲を強く感じた。私は、開発や発展を市場原理のみに委ねるべきではないと考えている。むしろ、現地の人々のオーナーシップが十分に発揮され、取り残される人々が生じない形で、社会全体として持続的に発展していくことが重要だ。

3. ナガランド州での正義について



コヒマ大聖堂からは、ナガランド州の州都コヒマを一望できる。カラフルな低層建築がぎっしりと密集し、ところどころに教会の十字架が見える。コヒマの街並みは圧巻である。私は一眼レフカメラのレンズを望遠レンズに付け替え、街並みを顕微鏡でプレパラートの隅々まで観察するように眺める。そして再び肉眼で丘陵地帯に広がる情景を俯瞰する。丘陵地帯は建物で埋め尽くされているが、やがて例外的な一帯の存在に気づく。周囲には建物が乱立

しているにもかかわらず、その部分だけピースが欠けて台紙が露出しているかのようだ。しかも、よく見るとアルファベットがこちら側に向けてメッセージを発している。

“AR FRIENDS OF NE “

コヒマ初日、私たちは中心部から少し離れたナガ族のビレッジを見学した。その帰り道、私は武装した兵士が乗る軍事車両を何度か目にした。兵士らの顔立ちは、彼らがナガランド州の出身ではないことを示唆していた。この兵士たちは、おそらくインド軍の準軍事組織であるAR (Assam Rifles : アッサム・ライフルズ) である。NEとはNorth East, すなわちインド北東部を指す。

インド北東部の一部地域は、日本の外務省の危険情報でレベル2 (不要不急の渡航中止) に指定されている。今回の渡航先には含まれていないが、ナガランド州にもレベル2の地域が存在する。本報告書ではその背景を詳述することは控えるが、ナガランド州の政情不安は「南アジアで最も長く続く内乱」とも形容される。ナガランド州には「ナガ」と呼ばれる人々が居住し、ナガはさらに政府に認定された17の指定トライブに分類される。1947年のインド独立に際し、ナガの人々はインドへの編入に異議を唱え、しだいに独立要求へと発展した。それに対し、1955年にインド中央政府は軍隊を投入し、現在まで続く長期的な紛争となっている。1958年に導入された法律が、第一章で紹介した軍特別権限法 (AFSPA) である。アッサム・ライフルズはAFSPAに基づき、同地域における治安維持部隊として活動してきた。AFSPAが適用されている地域では、中央政府の治安部隊は令状なしで捜索を行うことが認められており、さらに将校は民間人に対して致命的な武力を行使しても、原則として刑事責任を問われない。AFSPAは過去の遺物ではなく、現在も続く問題である。2021年12月には、ナガランド州東部モン県でアッサム・ライフルズが誤情報に基づいて実施した対テロ作戦により、民間人14名が無差別に殺害される事件が発生した。AFSPAをめぐるのは、これまでも違憲性を争う裁判が提起されており、同法の長期適用やそれに基づく弾圧に対して、人権団体から強い批判が寄せられている。

本節で扱うテーマ——ナガランド州での正義——は、容易に語り得るものではないかもしれない。ナガランド州の住民でもなければ、同州の専門家でもない私に論じる資格はあるのだろうか。仮に資格があるとしても、同様の理由で私の論考にはどこまでの価値があるのだろうか。それでも、私はナガランド州の情勢を他人事として忘れ去ることができない。そして、まさに外部の人間であるからこそ提供できる視座があるのではないかとも考えている。

私はナガランド州を訪問し、ナガランド大学の学生と意見交換を行った際、同州の若者が独立運動に関してどのように考えているのかを尋ねた。そのとき、ある学生が私の目をまっすぐ見て「私は独立したい」と語った場面が、今も鮮明に記憶に残っている。その瞬間も、そして今も、私はどのように返答すればよいのか自信がない。ナガの人々と中央政府の軍隊との衝突、そしてAFSPAをはじめとする弾圧は、筆舌に尽くしがたいものがあるだろう。他方で、「独立」は果たしてその解決なのだろうか。おそらく私よりも若い学生が発した一言は、疑問文でないにもかかわらず、難題と化した。個々の議論に入る前に、本節で述べたいことを明確にしておきたい。まず、ナガの人々自身がナガランド州の歴史を自らの手で書き起こす作業が必要である。それは、紛争や弾圧によって命を失った人々について、体系的な調査を含む。そして、そうした記録と調査を基盤として、中央政府との協議に臨むべきである。

3. 1 社会的正義を迫る必要性

ナガランド州を訪問するにあたり、私はAFSPAに象徴される強権的で正当化された暴力を理解する手がかりとして、1973年9月11日にチリにおいてクーデターで権力を掌握したピノチェト政権下で行われた人権侵害を念頭に置いていた。チリでは民主化への体制転換後、軍政期に行われた陰惨な人権弾圧の真実究明が進められ、犠牲者の名誉回復や遺族への説明、補償が実施された。さらに、真実の解明を通じて明らかになった加害主体に対しては、刑事責任を含む国内外からの責任追及が行われた。この一連のプロセスは移行期正義と呼ばれる。ナガランド州においても、2021年の事件に象徴されるように、1958年にAFSPAが導入されて以降、中央政府の治安部隊は現地の人々への透明性を担保することなく活動してきた。AFSPAに基づいて行われた人権弾圧を、ナガの人々はどこまで把握できているのだろうか。

私がこの論点に強い関心を抱く理由の一つは、幼少期からよく聴いていたStromaeの曲にある。ベルギー人のアーティスト、Stromaeが2013年にリリースした「Papaoutai」という曲は伝説圏を席卷したメガヒットだが、そのテーマはStromae自身の体験であるパパの不在である。ルワンダ人であるStromaeの父親は、彼が8歳のときにルワンダ虐殺で命を落とした。ナガランド州でも、どこかで「Papaoutai」のサビにある“Papa, où t’ es?”（パパ、どこにいるの）という問いが響いているのではないかと。AFSPAのもとで命を奪われた人々の家族は、「なぜ」「どこで」「誰が」という説明を待ち続けている。説明を待ち望む遺族に寄り添い、真実を明らかにし、責任を問うことは、よりよい社会への大きな前進となるはずである。

3. 2 ナガの人々はどのように考えているのか

ナガランド州政府の法務・司法局（Directorate of Law & Justice）は、同州における社会的正義を考えるうえで重要なアクターである。法務・司法局の担当者は、2021年の事件に言及しながら、中央政府に対してAFSPAの撤廃を求めていると述べた。また、ナガランド州がこれまで中央政府から抑圧を受けてきたとし、法の支配の確立が不可欠であると強調した。しかし残念ながら、2021年の事件を例外として、1958年のAFSPA施行以降に発生したその他の事例や、具体的な運用実態については把握していないという。そうした情報を所管するのは別の部署だと説明されたが、その部署がどこなのかは明確ではなかった。私はチリの例を引きながら、真実究明の必要性を指摘したものの、今後その点で調査が進む気配は感じられなかった。担当者が最後に述べた「多くの場合、私たちも無知である」という言葉が強く印象に残った。それは単に情報が不足しているという意味ではなく、「知ろうとしないまま無知でいる部分がある」と捉えることもできるように思えた。

続いて、ナガランド州政府の職員でない人々とも、本件や独立運動に関して意見交換した。ナガランド州では1997年に一部のナガ組織と中央政府が停戦に合意し、事実上紛争状態は解消されている。しかし、実際には「ナガと中央政府の紛争は現在も進行中（ongoing）である」との見方が多かった。なお、中央政府の治安部隊と交戦しているナガの武装グループは都市近郊ではなく主にジャングルに拠点を置いているようであり、都市住民から必ずしも肯定的に受け止められているわけではない様子だった。ナガランド州における真実追及に関しては、「そもそも紛争が進行中である以上、現段階での追及は難しいのではないか」という声があった。また、ピノチェト政権下のチリでは加害者と被害者が比較的明確に区別されるが、ナガランド州の独立紛争ではその線引きが必ずしも明確ではないのではないか、という

冷静な指摘もあった。私は、ナガ自身による真実追及のプロセスこそが、自らの歴史に対する自決権の行使であり、ひいては集団としての体系的な記憶の継承につながるものであり、ナガが独立を志向するのであればなおさら重要なのではないかと指摘した。しかし、この視点については、これまでナガ同士の議論のなかであまり共有されてこなかったというフィードバックを受けた。

様々なフィードバックを受けて、まずナガの人々が現段階で自らの過去を直視できる状態にあるのか疑問を抱いた。真実を追求することには、当然ながらデリケートな部分を扱うことでありその点ですでに抵抗もあるが、ナガランド州の独立における加害者と被害者の区別が必ずしも明確でない可能性を考えればかえって国内外に独立を訴えるうえで不利な情報もあるだろう。さらに、ナガの多様性についても考慮する必要がある。第一に、ナガランド州のナガは17の指定トライブに分類される。加えて、ナガの政治勢力についても、その主張や立場は一樣ではないのではないだろうか。比較政治学者のファン・リンスは、民主体制の崩壊に関する議論の中で、そもそも体制に反対する「非合法的」反対派（武装組織）だけでなく、「非忠誠的反対派」や「準忠誠的反対派」に分類される政治的なアクターの存在を指摘している（リンス 2020: 77-103）。「非忠誠的反対派」とは、合法的に議会に存在するものの、民主体制そのものの正統性を否定し、体制変動や制度の破壊を志向する勢力を指す。そして「準忠誠的反対派」とは、表向きは民主体制のルールを受け入れつつも、体制が危機に陥れば非忠誠的反対派と連携し過激化し得る曖昧な立場の勢力である。つまり、ナガの人々は必ずしも単一の意見や立場に収斂するのではなく、多様な視点が併存する共同体なのである。

真実追及そのものも決して容易なプロセスではない。紛争後の真実追及に関しては、ラテンアメリカ諸国やアフリカ諸国で「真実和解委員会」という手法が採用されてきた（松野 2007）。名称が示すように、真実と和解は切り離せない関係にある。他方で、その性質上、真実和解委員会自体が政争のアリーナとなることもある。また、委員会がどこまで独立した調査権限を行使できるかには、政治的制約をはじめ、技術的な制約、そして当然ながら感情的な制約も存在する。真実追及の過程で新たな火種が生まれ、争いが再燃する可能性も否定できない。さらに、自らの国や民族を正当化するために「受けた被害」を過度に強調するあまり、「被害者ナショナリズム」が生まれ、過去に自分たちが行った「加害」や将来的に生じ得る「加害」から目を背ける危険性もある。

しかし、それでも真実追及が重要だと考えるのは、そうしなければ独立の実現どころか、ナガのアイデンティティそのものが失われかねないからである。実際、ナガランド州の学校教育ではナガの独立紛争を扱うことができず、そもそも独立紛争に関する教科書が存在しない。現在、そのような教材を整備する取り組みを模索しているとも聞かすが、歴史を語り継ぐ仕組みが整わなければ、ナガの歴史記憶は次世代へと継承されていかない可能性がある。

3. 3 独立について

ナガの人々は、日常のなかでどの程度「独立」を意識しているのだろうか。カカ・イラルの著書『血と涙のナガランド——語ることの許されなかった民族の物語』は、ナガの人々がいかに凄惨な暴力を受けてきたのか、そしてその苦しみがどれほど深いものであったかを描いている。こうした背景から、私は「独立」という語を、重い歴史的経験を背負った概念として受け止めていた。しかし、現地の人々が口にする「独立したい」という言葉は、私の想像とは異なり、どこか日常性を帯びているように感じられた。本節冒頭で紹介した大学生の

言葉も含め、これまでの独立運動に伴う残忍性や悲劇を直接想起させるものではなかった。むしろ、「買い物に行きたい」といった日常会話の延長線上に、「独立したい」という言葉も置かれているかのような印象を受けたのである。ナガの人々がインドからの独立を求めてから70年以上の時間が経過する中で、「独立」という言葉はその年月をどのように渡り歩いてきたのだろうか。

また、「ナガ」という主語は、一つの統合された思想を共有する主体を表現する言葉として適切ではなくなっているのではないか。前述した政治態度の違いに加え、財政面においてもナガランド州は統合されているとは言い難い。ナガに限らず、指定トライブは一部の税について優遇措置を受け、納付を免除されている。そのため、指定トライブが多く居住するナガランド州の財政は中央政府への依存度が高い。この点を踏まえても、独立後のナガランド州の姿を想像することは容易ではない。

さらに、紛争の長期化はナガ同士の派閥争いを生み出してきた。したがって、仮に独立が達成された場合、ナガランド州に住む17の指定トライブのうち、どのトライブが政治的な力を握るのかをめぐって、将来的に新たな対立が生じる可能性もある。また、仮に独立が達成されてナガが多数派となったとき、ナガランド州で生活するナガ以外の人々がどのように扱われるのかという懸念も残されている。

ナガランド州の独立問題は、きわめて複雑な課題である。しかし私は、ナガが自らの歴史について一つひとつ丁寧に言葉を紡ぐことが重要だと考える。それは独立問題に先立つ、ナガの集団的アイデンティティを構築し継承していくための欠かすことのできない重要な作業だからである。

4. インド北東部から日本に働きに来る若者たち

日本と外国人労働者について議論する際、私たちはしばしば日本側の視点にのみ立ってしまいがちである。では、諸外国から来日する人々について、私たちはどれほど理解しているのだろうか。今回の研修では、アルナーチャル・プラデーシュ州で日本語学校を訪問し、ナガランド州では州政府職員と日本での就労について意見交換を行った。以下では、その際の経験を共有したい。

日本語学校はアルナーチャル・プラデーシュ州の州都イタナガル市内から少し離れた場所にあった。4階建ての建物の3階に案内され、天井の高い部屋が日本語の教室として使われていた。室内には机といすが整然と並び、まさに「教室」という雰囲気である。日本に住んでいたこともあるアイコさんが日本語教師を務める。その日はおよそ30名が出席していた。この日本語教室に通うのは、看護を学んだ20代半ばの女性たちで、彼女らは早ければ2027年から日本の介護分野で働くことを計画している。アルナーチャル・プラデーシュ州には26の指定トライブが存在し、日本語学校に通う女性たちも多様なトライブの出身である。そして、彼女らは寮で共同生活を送っているようだった。生徒たちは日本語でのあいさつと「カンントリーロード」の合唱に加え、それぞれのトライブの民族衣装を身にまとい、ダンスを披露してくれた。その日は小さなグループに分かれて、ざっくばらんに会話をした。彼女たちは日本の映画やドラマについてよく知っており、日本語学習で最も苦勞しているのは漢字だと話していた。

翌日、アルナーチャル・プラデーシュ州を離れる前に、彼女たちとのランチ会が開かれた。日本側の視点から見れば、彼女たちは「就労のために来日する外国人労働者」というカテゴリーに分類されるのかもしれない。しかし、少なくとも私には、そのような普遍的な枠組み

の中に彼女たちを押し込めることはできなかった。日本で働く予定であるという点では共通していても、ランチ会での会話を通じて、一人ひとりが異なる背景や個性を持つ存在であることを強く意識させられた。介護人材を必要としているのは日本だけではなく、ドイツをはじめとするヨーロッパ諸国もインドに関心を持っている。そのような状況のなかで、彼女たちが日本で就労することを決断した理由は様々あるが、中でも賃金の高さや文化的な近さなどが挙げられた。

ところで、インド北東部の若者が懸念している政治課題の一つも移民問題であった。複数の若者から、インド国内（メインランド）や、ミャンマー、バングラデシュといった周辺国から、正規の手続きを経ずに北東部へ流入する移民への対応を求める声が聞かれた。具体的には、移民が地元の雇用機会を奪っているという指摘や、国境管理の不十分さに対する懸念が挙げられていた。

さて、日本の人材会社はインド北東部をどのように捉えているのだろうか。ナガランド州では、偶然にも日本の人材派遣会社の視察団と出会った。彼らにとってナガランド州を訪れるのは初めてだという。インドの周縁部に、日本の地方（周縁部）から訪れた人々が足を運んでいたこと自体が興味深かったが、彼らが口にした同州の印象の一つは「ナガの人々は日本人と顔立ちが似ている」というものであった。実際、インド北東部の指定トライブに属する人々は、メインランドの人々とは異なる身体的特徴を持つことが多く、外見的には東アジアの人々に近いと指摘されることがある。特にナガランド州の指定トライブであるナガ族の人々は、日本人と似た印象を与える場合があるようだ。こうした外見的な近さが、日本の介護分野で働く外国人材の候補としてナガ族が注目される一因になっていると、視察団の話からうかがえた。視察団の一人から、翌日にナガランド州の日本語学校を訪れてみないかと誘われた。そこには約200人の生徒が在籍しているという。労働市場において、人々はしばしば数値として扱われ、個々の固有性は抽象化され、普遍的なカテゴリーへと置き換えられてしまう。視察団の語り口からは、ナガランド州の若者たちがあたかも「生産され、輸出される対象」として捉えられているのではないかという印象すら受けた。それに追い打ちをかけるように、ナガの若者を受け入れる日本においては、外国人労働者の受け入れを肯定的にとらえる声ばかりではない。日本の世論の一部においては、外国人労働者の受け入れに否定的な意見が近年強まっている。例えば、外国人に関するニュースが流れるとSNS上では心ない言説があふれ、共同体規範が脅かされるような映像が拡散されれば、確証もないまま外国人が非難の対象となることもある。

しかし、日本は歴史的に移民と無縁であったわけではない。むしろ、日本自身が移民の送り出しの主体であった時期がある。日本は、帝国主義成立期のなかで、その急激な社会変動の中で生じた農村部の諸矛盾を解決する手段の一つとして、積極的に移住政策を進めた過去がある（宮地 1987: 130-131）。第一の移住先は北海道で、1882年から1935年までの間に全国から実に約72万戸が移住した。そして、日清戦争を契機に、日本人の移住先は海を渡って朝鮮半島や中国大陸へと広がりを見せた。その後、日本人はさらにハワイ、アメリカ本土、そしてブラジルをはじめとする南米諸国へと移住先を拡大していった。日本から移住した人々やその子孫は、時に現地の排日気運に晒されることもあった。日本がますます移民を受け入れる国となる中で、そうした日本の移民の歴史——とりわけ、移民として海外に渡った日本人や日系人が経験した困難や排斥——を見つめ直すことが、現在の社会変動に対してより柔軟で包摂的な姿勢を持つための重要な手がかりとなるだろう。

最後に、ナガランド州政府の商工局 (Department of Industries & Commerce) は、同州の若者が日本で経験を積むことを非常に好意的に評価していた。彼らによれば、日本で働いた若者が、日本の労働文化、歴史、規律、価値観などを習得して帰国することを期待しているという。こうした経験が、将来的に州の発展に寄与するとの見方が示されていた。

私としても、日本で就労経験を積む若者たちの生活が、充実したものとなることを心から願っている。彼らが単なる「労働力」としてではなく、一人ひとりの個別性を持つ存在として尊重され、安心して働き、学び、生活できる環境が整うことを強く望んでいる。

おわりに

2月13日に帰国して以来、インド北東部のことを考えなかった日はほとんどないと言ってよい。3月初旬には国際会議に参加するため再びインドを訪れ、デリーで1週間ほど過ごし、北東部とは異なるインドの姿に触れる機会を得た。両日程とも平均睡眠時間は6時間ほどで、その日の出来事を落ち着いて振り返る余裕もあまりなかった。4月には大学院の授業が始まり、頭の中で反芻していたインドでの経験をようやく自分の言葉として整理できるようになったのは初夏になってからである。

5月中旬を過ぎ、店頭には2月に咲いた梅が青い実となって並んでいた。インド北東部での経験もまた、私の中で日々成長し、読み返したインド北東部に関する資料や、断片的に浮かんで消える思考が少しずつ混ざり合い、ようやく言葉として立ち上がってきたものが、この報告書である。

本報告書は、インド北東部について明確な結論を導き出すことを目的としていない。しかし、論争的なテーマであるという理由だけで、北東部が直面する問題に触れないのであれば、研修の意義とは何なのだろうか。今回の派遣では、北東部の政治家や州政府関係者の説明と、現地の学生や市民社会の活動家の語りが必ずしも一致しない場面もあった。加えて、私が見聞きしたのはインド北東部のごく一部にすぎないし、同じものを見ても、どこに焦点を当て、どのように解釈するかは個人によって異なる。中立性という観点からいえば、ナガランド州の独立運動について私は一方の立場の話しか聞いていない。それでも本報告書を執筆したのは、現実の複雑性を認めたくて、それを私なりに言語化することに意味があると考えたからである。その際、なぜそのように考えるに至ったのかという背景をエピソードとして織り込みつつ、できるだけ晦渋な文章にならないよう努めた。もう一度同じ日程で北東部を訪れたとしても、同じ結論に至るとは限らないし、扱うテーマも異なっていたかもしれない。本報告書を執筆する過程で、記述では捉えきれない社会の複雑性を痛感した。しかし同時に、その複雑性を紐解き、言語化していく作業の重要性も強く認識した。今後もその営みを続けていきたい。

研修を通して学んだことを一つ挙げるとすれば、こう答えるだろう。自分のまったく知らない世界——この研修に参加しなければ一生接点が生まれなかったかもしれない世界——に足を踏み入れてみると、そこにも確かに人々の暮らしがあり、日々さまざまなことを考え、悩み、語り合う人たちがいて、冗談を言えばちゃんと笑ってくれて、そして美しいものを大切にしている人々がいるということ学んだ。

私は将来、専門的見地から政策形成に携わりたいと考えている。本研修を通じて、さまざまな政治レベルの人々と交流するなかで、政策とは誰のためのものであり、どのような政策

が本当に必要なのかを考える重要性を強く認識した。また、インド北東部での経験は翻って日本社会のあり方や外交政策についても多くの示唆を与えてくれる。インド北東部で得た唯一無二の経験を、今後の人生の糧としていきたい。

謝辞

まず、本研修を実施してくださった笹川平和財団戦略対話・人材育成グループに深く感謝申し上げます。とりわけ、面接を経てこの貴重な機会への参加をお許しいただいた小西グループ長、梶ヶ谷研究員、辻本研究員に心より御礼申し上げます。次に、インド北東部をご専門とされる笠井先生、木村先生に感謝したい。両先生からは渡航前プログラムにおいて大変貴重な視座を頂戴し、帰国報告会でも有益なフィードバックをいただいた。また、両先生が編者を務められた『インド北東部を知るための45章』は、同地域への理解を深めるうえで欠かせない存在であった。

インド北東部では、本当に多くの方々にお世話になった。現地の人々との交流は、北東部での記憶をより鮮明に刻み込んでくれた。インド北東部で出会った学生の皆さん、ジョーさんと彼のご家族、道中を共にし北東部について丁寧に解説してくれたNathanielさん、Fullstarwellさん、Sesinoさん、Keduokhrietuoさん、訪問した3州の各大学関係者の皆さん、Sab yasachiさんをはじめとするAsian Confluenceの皆さん、アルナーチャル・プラデーシュ州のペマ・カンドゥ首相をはじめ各州政府関係者の皆さん、そしてインド北東部でお会いしたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

最後に、インド北東部を共に訪れた研修チームにも深く感謝したい。現地コーディネーターを務めてくださった中野さんと細井さんには、多方面で支えていただいた。そして、現地での体験がこれほど充実したものとなったのは、笹川平和財団から同行してくださった辻本さんの存在によるところが大きい。さまざまな場面でご迷惑をおかけしたが、最後まで私たちのチームを導いてくださった。また、開放的な性格を持ち、未知の領域を切り拓こうとする気概に満ちた5名の日本人学生——川崎さん、滝川さん、カッティングさん、入門さん、小野さん——と交流できたことを、大変光栄であり、幸福に思っている。移動中の車内、宿泊先、ホームステイ先など、あらゆる場面で議論を交わし、異郷の地にいなながらも強い安心感を覚えたのは、このチームだったからだと確信している。

本報告書を通じて、お世話になった皆さまへの感謝を、わずかでも形にすることができれば幸いである。

参考文献

〈すべての章〉

アルンダティ・ロイ著、加藤洋子訳『誇りと抵抗——権力政治を葬る道のり』集英社、2004年

笠井亮平、木村真希子編『インド北東部を知るための45章』明石書店、2024年

第一章 渡航前——インドに対する印象と事前レポート

- 池田丈祐「国際関係論における「中心」と「周辺」」加藤朗，大中真編『国際学の先端研究——「準」周辺から見た英国学派の国際社会論』桜美林大学出版会，2024年
- 井上恭子「インド北東地方の紛争——多言語・多民族・辺境地域の苦悩——」武内進一編『国家・暴力・政治——アジア・アフリカの紛争をめぐって——』アジア経済研究所，2003年
- 同「憲法第6付則を通してみるインド北東地方——多民族地域における差別的保護政策の問題——」近藤則夫編『インド民主主義体制のゆくえ——挑戦と変容——』アジア経済研究所，2009年
- 伊豆山真理「インドのテロ対策法制——個人の権利，コミュニティ間の政治，国家安全保障——」近藤則夫編『インド民主主義体制のゆくえ——挑戦と変容——』アジア経済研究所，2009年
- 栗原俊彦「混迷する国際情勢におけるインドの現在とこれから」『海外投融資』2022年9月号，49-53頁，2022年
- 近藤則夫，佐藤創「2019年の連邦下院選挙を控え流動化する政治——2018年のインド」『アジア動向年報』2019巻，483-516頁，2019年
- 近藤則夫，辻田祐子「ゆらぐ政治的自由，遅れる雇用創出——2022年のインド」『アジア動向年報』2023巻，471-502頁，2023年
- 佐藤宏，湊一樹「第3次モディ政権，不安の船出——2024年のインド」『アジア動向年報』2025巻，465-496頁，2025年
- 鈴木正崇「インドで中心と周縁を問い直す——ドライブと民間信仰の視点から——」『南アジア研究』2020巻32号，147-153頁，2021年
- 湊一樹『「モディ化」するインド——大国幻想が生み出した権威主義』中公新書，2024年

第二章 インド北東部での研修——事前課題への応答

- 木村真希子『終わりなき暴力とエスニック紛争——インド北東部の国内避難民』慶応義塾大学出版会，2021年

第三章 北東部をエピソードから捉える

- イラル，カカ・ディエヘコリエ著，木村真希子・南風島渉『血と涙のナガランド——語ることの許されなかった民族の物語』コモンズ，2011年
- 太田義器「平和の文化に向けて」石崎嘉彦，太田義器，三浦隆宏，西村高宏，河村厚，山田正行『グローバル世界と倫理』ナカニシヤ出版，2008年
- 柄谷行人『倫理21』平凡社，2003年
- 重松尚「中・東欧諸国における多様な歴史記憶——現在から過去に向けられるまなざし」阪本拓人，キハラハント愛編『人間の安全保障——東大駒場15講』東京大学出版会，2024年
- フアン・リンス著，横田正顕訳『民主体制の崩壊——危機・崩壊・再均衡』岩波文庫，2020年
- 宮地正人『国際政治下の近代日本』山川出版社，1987年

ベンジャミン・R・バーバー著、『ル・モンド・ディプロマティーク』日本語版編集部編訳
「消費する「自由」のある世界」『力の論理を超えて——ル・モンド・ディプロマティーク
1998-2002』NTT出版, 2003年

松野明久「平和構築における真実探求——紛争後の東ティモールの事例から」城山英明, 石
田勇治, 遠藤乾編『紛争現場からの平和構築——国際刑事司法の役割と課題』東信堂, 20
07年

南出和余, 太田哲, 山本達也, Mahmudul H. Sumon「南アジア都市部における少数民族の若
者のアイデンティティポリティクス」『南アジア研究』2020巻32号, 167-171頁, 2021年

Stromae. (2013). “Papaoutai” [Music Video]. Racine Carrée, Mosaert, [https://www.y
outube.com/watch?v=oiKj0Z_Xnjc](https://www.youtube.com/watch?v=oiKj0Z_Xnjc). (参照: 2026-06-08).